

## オープンソース事情

# 1 オープンソースソフトウェア(OSS)発展への期待

桑原 洋

hiroshi-kuwahara@maxell.co.jp  
日本OSS推進フォーラム

### OSS推進フォーラムの概要

OSS (オープンソースソフトウェア; ソースコードが開示されたソフトウェア)の活用が産業界, 政府機関, OSSコミュニティなどで急速に拡大する機運にある。これに呼応し, 政府の声かけもあり, 企業, 行政, 学識経験者などで構成するOSS普及団体「日本OSS推進フォーラム」が2004年2月に設立され, 日本における主要ITシステムベンダが積極的に参加しスタートした。設立当初から日本, 中国, 韓国の3国間での連携活動の重要性が政府間で認識, 調整され, 現在各国において同じ機能を持つ3団体が相互に連携をとりながら活動を推進している。末尾に「日本OSS推進フォーラム(図-1)」と「北東アジアOSS推進フォーラム(図-2)」各々の組織図を示す。

### OSS推進の基本理念

今回, 情報処理学会誌でOSSに関する連載を計画された貴重な機会に寄せてOSS推進の基本理念を明確にしておきたいと思う。

大切なことは推進の意義の明確化である。これは常に推進の基本理念に立ち戻り行動の自己評価を行うためにも大切であり, 必要なことである。そして, これは2つの面から捉えることが必要であると考えている。

1つはユーザの立場, もう1つはベンダの立場である。いずれもその根底に, ここ数十年にわたって特定のオペレーティングシステムを含む基幹ソフトのもとに, 使用

と開発の自由度を失ってきた長年にわたる時の流れがある。自由を失うことに, 人は, 長期間は耐えられないことの表れでもあろう。

まず, ユーザの立場で考えると, OSSの価値観は,

1. セキュリティを含む安心, 安全
2. 選択の自由(束縛からの開放)
3. 経済的効果(安価)
4. 将来に向かっての機能向上への自由権取得

であろう。

これまで市場を高度に成長させてきたレガシーオペレーティング・システムを含む非公開ソフトは, それなりにITの発展に大きな貢献をしてきたことは高く評価されてしかるべきだと思うが, 時代の変遷とともに, これが今危機感をもって見直されている。

次にベンダの視点で考えると, OSSに対する価値観は

1. 時代の流れ (OSSの普及) に沿っての事業展開, つまりOSSをベースとしたシステム受注の拡大
2. 中身を知ることができない製品を自らが販売することから生じる自己矛盾からの脱却
3. 顧客対応の質の向上, 信頼の確保
4. ソフト先行開発力の回復
5. 長期的な視点でのソフト開発能力, 人材の強化育成

であろう。

しかし, 現状は, ベンダ側に現状に対する不透明な執着マインドがあることも事実である。それはSE (システム・エンジニア) からすると, あまりにも慣れすぎた現在の非公開ソフトから, あえてよく知らないOSSに変えることへの不安, 余分な作業発生への抵抗感を覚えることからきている。また, ベンダが皆が同じものを採用している限り, ベンダ間の差として現れてこないために, ユーザ側に経済的メリットがあるにもかかわらず, ベンダ側に自発的な採用行動が現れてこないこともその原因として挙げられる。

### OSSの活用状況

ここで, OSSの現在の活用状況を概観してみたい。世界市場では, クライアントでの活用はいまだきわめて少なく, 2004年の出荷本数で見ると, Windowsが圧倒的なシェア93.9%, 次いでMacOSが3.7%, Linuxが2.3%となっている。一方, サーバ分野でみるとWindowsが69.7%, Linuxが11.9%, Unixが11.6%とOSSの伸長が著しい状況がうかがえる(IDC調査)。

一方, 日本市場では, クライアントにおけるLinuxのシェアは1%に達していない。サーバ分野では, 稼働台数ベースでWindowsが84.6%, Linuxが8.9%, Unixが6.5%となっており, 世界市場と同様, OSSの伸長が著しい状

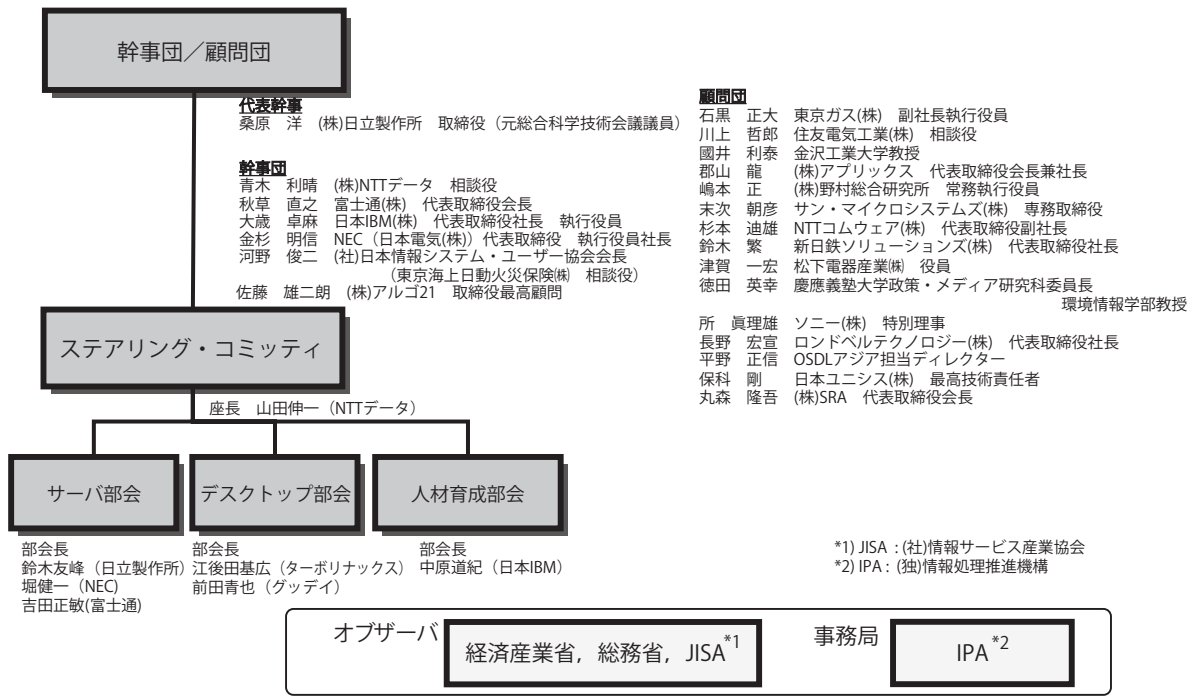


図-1 日本 OSS 推進フォーラムの組織

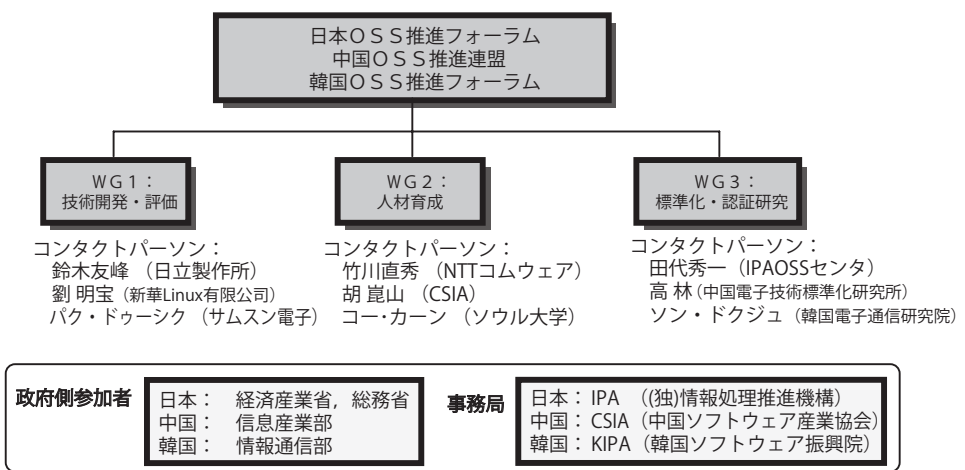


図-2 北東アジア OSS 推進フォーラムの組織

況にある(Linuxオープンソース白書2006).

### OSS発展の鍵

さて、このような普及状況、および前述したユーザ、ベンダの持つ価値観のもとでのOSSの推進なのだが、発展のかぎを握るのは、1つはユーザの目覚め、新たな機能要求によるOSS活動の活性化であり、他の1つはユーザの潜在要求をいち早く捉えて開発提供するOSS側の先行性確保、そしてこれを支えるOSSコミュニティの自由、かつ活発な活動であると考えている。ここに、これから

のOSS発展にとって欠かせぬ要件があり、当面の活動強化の重要な根幹がある。

現状はいろいろと活動が活発化しているが、まだまだコミュニティの中心は先行性を確保できる域には到達しておらず、自分でオペレーティングシステムをいじれることへの興味、興奮、非公開ソフトへのキャッチアップ、あるいは小さい機能改善が先行しているきらいがあると見ている。しかしサーバ用OSSの分野では、大手ベンダを中心に、ミッション・クリティカルな機能について積極的開発が見えるようになってきており、先行性が

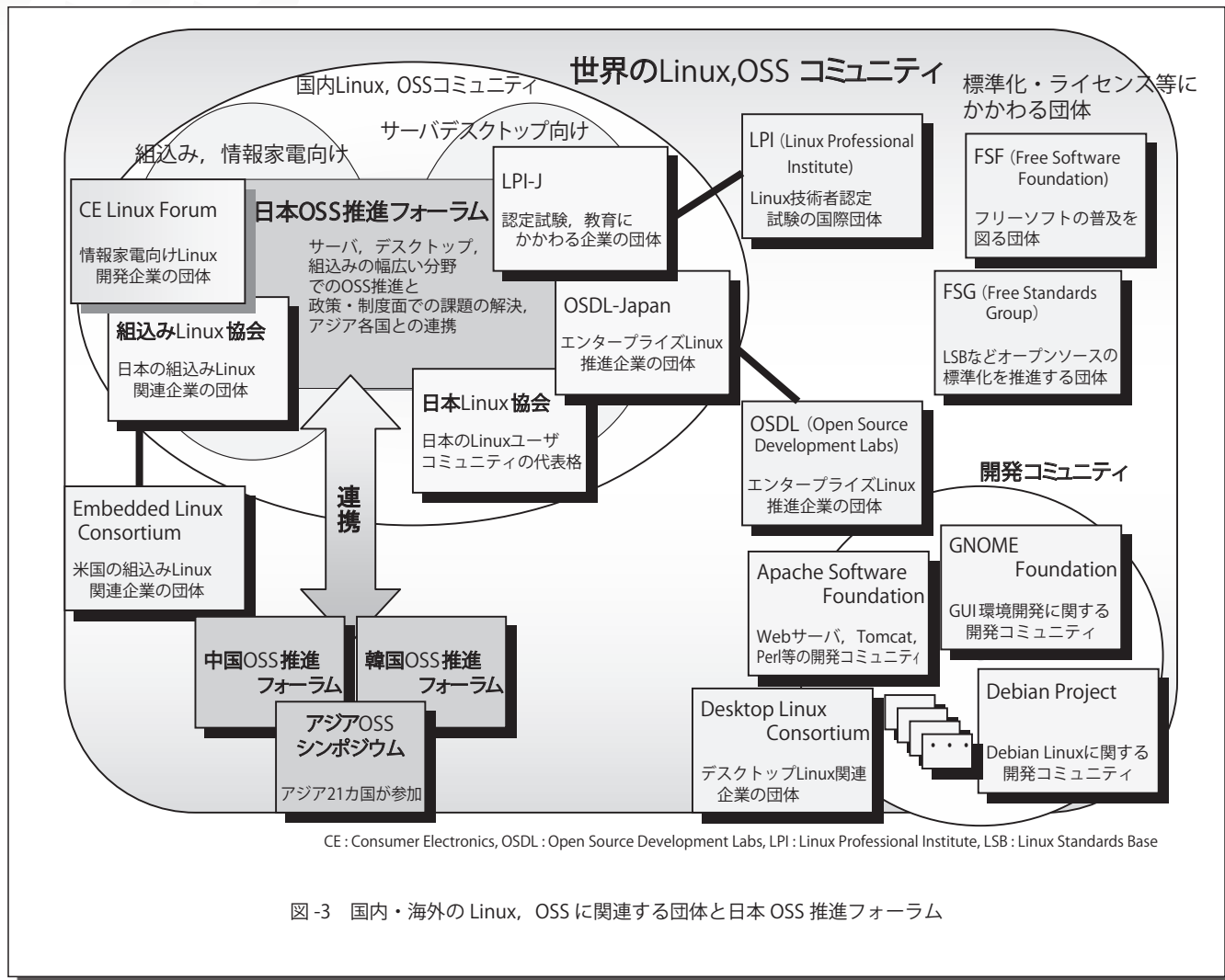


図-3 国内・海外のLinux, OSSに関連する団体と日本OSS推進フォーラム

確保される方向へ流れ始めたという意味で、先行きが楽しみな状況になってきている。「日本OSS推進フォーラム」としても、この先行性の積極的確保へ向けて活動を強め、ユーザメリットの追求を、ロードマップを示しつつ、OSSコミュニティとも連携しながら推進していきたいと考えている。

一方、ユーザの自覚、目覚めについては、OSSの良さ、可能性の大きさについて、ベンダサイドからの積極的なアプローチが必要である。しかし、先に述べた理由から、ベンダサイドも自発的にはなかなか進まない現状がある。そこで、普及拡大のためには、具体例を拡大し、実証して示していくことが有効であり、安全保障の視点からもOSSの推進を図る国の調達が拡大されていくことが重要で、国の調達方針との連携が不可欠だと思っている。OSSの啓蒙活動については、「日本OSS推進フォーラム」において、優れた適応例、効果などを大いにユーザに公開、開示しOSSへの理解、流れを活性化していくことが必要であると思う。

このたび経済産業省の支援を得て、IPAに「オープンソースソフトウェア・センター」が常設された。センター

の機能、活動内容については、今回のシリーズで詳しく説明される機会があると思うが、あらゆる情報のセンタとして、またOSS促進の具体活動の中心として活動し、発展していくことを期待したい。

なお、OSSの全体活動は国際的なコミュニティとの連携が不可欠である。それは、提供されるシステムが相互接続性、親和性などにおいて違和感がないことがユーザの視点で重要だからであり、この確保のため「日本OSS推進フォーラム」としても、積極的に国際コミュニティとの連結を図っており、その状況を図-3に示し、本稿を終わりたい。

(平成18年2月21日受付)

